

## 論文審査の結果の要旨

論文提出者：森川慎也

論文題目：Kazuo Ishiguro and His View of Life: Idealism, Nostalgia, Fatalism

(カズオ・イシグロとその人生観——理想主義、ノスタルジー、運命論)

本論文は、日系イギリス人作家カズオ・イシグロの小説を作家本人の人生観が投影されたものと見なし、彼のインタビュー記事などを手掛りとして、それを「理想主義」(idealism)、「ノスタルジー」(nostalgia)、「運命論」(fatalism)の3つのキーワードに即して読み解いて論じたものである。

序章においては、まず作品のなかに作家の人生観を見るという本論の立場が明らかにされる。現代の文学研究において、文学作品は著者本人が自己の人生観をそのまま描いたものではなく、著者から切り離された独立した言語構造物と考えるのが一般的だが、本論においては、他の作家に比べ、インタビューなどにおいて自作の意匠をきわめて饒舌に語るイシグロの言葉を信じるに足るものであるとの前提に立ち、それを元に作品が読み解かれることになる。

第1部は、イシグロの理想主義を中心として論が展開される。第1章では、1960年代、70年代のイギリスの文化思潮との関連において彼と同世代の若者たちの理想主義が論じられる。第2章では、理想を叶えようとするのが人間普遍の心理であるとのイシグロの考え方が論じられるが、その理想主義が一方で第二次世界大戦前に自分が日本で生まれていたらどうなっていたかとの彼の恐怖感と裏腹であることが第3章で示される。第4章では、さらにその理想主義と密接に関連するものとして彼の自分に対する、さらに他の作家に対する厳しい価値判断があることが示される。第5章では、その価値判断と関連するものとして、彼の作品中で登場人物たちが披瀝する職業倫理やプライドが論じられる。そして、その職業倫理やプライドが逆に運命的に登場人物たちを苦しめるカラクリが第6章で説明される。第7章は、そのような運命論にもかかわらず楽観主義的なイシグロ小説の結末が、彼の理想主義的な人生観を反映していると論じて第1部を締めくくる。

第2部のテーマはイシグロのノスタルジーである。第8章では、彼が初期の小説を書くにあたって自らの過去を利用した旨が述べられ、第9章では、彼が幼少期の思い出を「子供時代の泡」(childhood bubble)のようなものとして捉えていることが示される。第10章では、それが結局はどこかではじけて心の傷を生むことが、イシグロのノスタルジーとの関連において論じられる。そしてその傷の痛みがやがて中年期の危機 (mid-life crisis) となって戻ってくる第11章で論じられる。続く第12章において明らかにされる祖父母との別れというイシグロ個人の心の傷、罪悪感がどのように作品中のモチーフとして現われているかが第13章で論じられる。第14章では、心の傷が *A Pale View of Hills* と *The Unconsoled* の2作の具体的なモチーフになっていることが明らかにされ、第15章では、イシグロと死ん

だ祖父母との関係性の修復が *When We Were Orphans* の隠れたモチーフであることが指摘される。

第3部の主題はイシグロの運命論である。第16章では、人間の世界観が近視眼的であるとのイシグロの認識が論じられる。大局的な物の見方ができないゆえの不幸は、彼の最近の作品にモチーフとして描き込まれている。第17章は、彼の運命論が *Never Let Me Go* との関係において論じられる。とくに、自らの生命すら自由にできない人間の運命が作品の大きなテーマであることが指摘される。第18章では、イシグロの理想主義とノスタルジーは最終的に運命論のなかに統合・昇華されるものであると論じられる。

結論として、人間は高い理想を掲げ、ノスタルジーを抱いて生きながらも、どこかで心に傷を負い、どうしてもなく何かの運命に引き込まれていくというイシグロの人生観がさまざまに形を変えて彼の小説に表われていることが論じられる。

本論文は、カズオ・イシグロがインタビューなどにおいて際立って作意を饒舌に語る作家であることに着目し、その内容を信じるに足る情報であるとの前提に立ち、彼の作品をその人生観の表出として読み解いた点で独創的であり、作品を独立したテキストと見なす現代の批評理論に対する大きな問題提起となっている。また、そのような読み方をすることによって、ややもすると日系人としてのアイデンティティばかりが目されるイシグロの作品の中に存在する普遍的な「人生観」を浮き彫りにしてみせた点で評価に値する。論文審査時には、インタビューの内容も聞き手によって変わってくるのではないか、「理想主義」や「運命論」にもいくつか違ったレベルがあるのではないかと、といった細かい問題点も指摘されたが、それらの問題はいささかも本論の価値を損なうものではない。本論文は、作品の裏に作家を見るというきわめて自然な読みをしかるべき学問的手続きによって正当化し、これまでのイシグロ批評では指摘されなかった多くの文学的価値を抽出した点において、イシグロ研究に大きな一石を投じたものである。また、そのような読みの妥当性を示したものとして、今後の文学批評に対するその貢献度は計り知れない。

したがって、本審査委員会は博士(学術)の学位を授与するにふさわしいものと認定する。